

中古語複合形容詞の一語性 — [名詞+形容詞] とそれに類する複合形容詞的表現を中心に—

池上 尚 (国立国語研究所コーパス開発センター) †

Compound Adjectives as One Word in Early Middle Japanese : Focusing on Noun-Adjective Compounds and the Like

Nao Ikegami (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

名詞・評価形容詞が直接結びつく複合形容詞（候補）、名詞・評価形容詞が助詞や副詞を（複数）介して結びつく複合形容詞的表現を「日本語歴史コーパス 平安時代編」によって網羅的に抽出し、構文バリエーションの把握、コロケーション強度の数値化を行い、中古和文における複合形容詞 [名詞+評価形容詞] の一語性（名詞・形容詞の結びつきの強弱、語としての在り方）を重層的に考察した。その結果、複合形容詞 [名詞+評価形容詞] と認めるべき名詞—評価形容詞の多くが、①共時的に複合形容詞的表現にパラフレーズ可能で、語と文との境界に位置するような一語性を有していたこと、②人間のある状態についての善し悪しを表現するために産出されたと考えられること、を指摘した。

1. はじめに

ココロヨイのような名詞・形容詞の組み合わせを 1 語の複合形容詞 [名詞+形容詞] と見るか、主述関係をなす名詞—形容詞の 2 語と見るかといった語認定の問題は、内省のきかない時代の資料を扱う場合に大きな問題となる¹。

須永(2011)は、「中古和文 UniDic」作成時の品詞情報付き中古語コーパス²から抽出した、名詞とヨシ/アシ/アリ/ナシとの組み合わせを対象とし、語と語とのコロケーション強度を数値化するダイス係数³を用いて中古語の語認定の方法を探り、“ダイス係数 0.004 以上”が一つの基準となり得ることを明らかにした。しかし、須永(2011)も指摘するように、指標の精緻化に向けては複合語候補となる 2 語の組み合わせの構文環境にも着目することが望ましい。すなわち、同じ名詞・形容詞の組み合わせでも、間に助詞を介したり（例「人の心のよきもあしきも、」紫式部日記）、連体句や副詞を伴ったりする場合があります（例「いと心よからむ人は、」同）、構文環境により 1 語としての認めやすさに差が生じるのである。

こうした観点は、コーパス開発に際しての語認定にとどまらず、古い時代を扱う複合語研究においても積極的に導入していく必要がある。これまでの先行研究や索引類では、複合語候補となり得る、前項と後項とが直接結びつくものを把握することは可能であったが、それらが有する（あるいは有しない）構文バリエーション、いわば複合語的表現までも含めた全体像については十分に知り得なかった。

† n Ikegami@ninjal.ac.jp

¹ 以下、1 語の複合形容詞であること表す場合に [名詞+形容詞]、名詞・形容詞の 2 語が（助詞・副詞を介して）結びついていることを表す場合に名詞—形容詞と表記する。

² 学習用コーパス。総語数は句読点含め約 80 万語。収録作品は次の通り。伊勢物語・大和物語・土佐日記・紫式部日記・更級日記・源氏物語・竹取物語・古今和歌集仮名序・枕草子・大鏡。

³ 中心語頻度と共起語頻度の関係から 2 語のコロケーション強度を計測する尺度である。共起頻度（組み合わせられて現れた XY の語数）を中心語頻度と共起語頻度の和（組み合わせのもとになる X・Y のそれぞれの語数の和）で割って 2 倍した値である。式は次のようになる。

$$D = 2 \times \frac{\text{「XY」の語数}}{X \text{ の語数} + Y \text{ の語数}}$$

本発表では如上の課題に取り組むべく、複合形容詞(的表現)と考えられる名詞—形容詞の様々な組み合わせを「日本語歴史コーパス 平安時代編」によって網羅的に抽出し、その構文パターンの観察を通して中古語における一語性(名詞・形容詞の結びつきの強弱、語としての在り方)を重層的に考察する。形容詞の中でも特に評価形容詞ヨシ/ヨロシ/アシ/ワロシ/ワルシからなるものを取り上げることで、ある複合形容詞(的表現)の類義・対義の関係にある複合形容詞(的表現)についても見ていく。

2. 調査にあたって

2. 1 調査対象

調査には「日本語歴史コーパス 平安時代編」(中納言 1.5.0/長単位データ 1.0)⁴を使用し、次のような検索条件式により名詞—評価形容詞のデータを抽出した。

【検索条件式の例：名詞—{助詞/副詞}—形容詞】

キー: ((品詞 LIKE "形容詞%" AND 語彙素読み LIKE "ヨイ")OR(品詞 LIKE "形容詞%" AND 語彙素読み LIKE "ヨロシイ")OR(品詞 LIKE "形容詞%" AND 語彙素読み LIKE "アシイ")OR(品詞 LIKE "形容詞%" AND 語彙素読み LIKE "ワロイ")OR(品詞 LIKE "形容詞%" AND 語彙素読み LIKE "ワルイ")) AND 前方共起: (品詞 LIKE "助詞%" OR 品詞 LIKE "副詞%") ON 1 WORDS FROM キー AND 前方共起: 品詞 LIKE "名詞%" ON 2 WORDS FROM キー WITH OPTIONS unit="2" AND tglWords="20" AND limitToSelfSentence="1" AND tglBunKugiri="#" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="|" AND encoding="UTF-16LE"

2. 2 考察対象

データを精査する過程で、名詞—評価形容詞と見なせないもの(例「四の君によき人あはせむ」^{落窪物語}.4)を除外し、前項名詞にかかる程度副詞・接頭辞「御」・連体句の有無についても確認した。その結果、次の表1に示すように、中古和文に出現する名詞—評価形容詞の構文パターンは15種類あることが分かった⁵(表1中I・II・III類については後述)。

表1 中古和文における名詞—評価形容詞

類	構文					
I	A		名詞		形容詞	
	A+	程度副詞*				
III	a	接頭辞「御」/連体句				
II	B		名詞	助詞	形容詞	
	B+	程度副詞*				
III	b	接頭辞「御」/連体句				
II	C		名詞	助詞	助詞	形容詞
	C+	程度副詞*				
III	c	接頭辞「御」/連体句	名詞		副詞	形容詞
	D					
	d	接頭辞「御」/連体句				
	E		名詞	助詞	副詞	形容詞
	e	接頭辞「御」/連体句				
	F		名詞	助詞	助詞	副詞
f	接頭辞「御」/連体句					

*程度副詞に類する形容詞連用形イミジク・又無クを含む。

⁴ 総語数(短単位)は738153語(空白・記号・補助記号含め871462語)。収録作品(その語数)は次の通り。古今和歌集(31288)・竹取物語(10317)・伊勢物語(13824)・大和物語(23090)・平中物語(12403)・土佐日記(6685)・落窪物語(54583)・堤中納言物語(15699)・枕草子(66044)・源氏物語(445675)・和泉式部日記(10891)・紫式部日記(17440)・更級日記(14659)・讃岐典侍日記(15555)。

⁵ 構文のパターンとして想定されるものは他にもある(例えば、名詞が助詞3つを介して形容詞と結びつくもの)が、用例の得られたもののみ表1に掲載した。

このうち、(類を問わずに) 延べ語数が3以上の名詞一評価形容詞を考察対象とする。

なお、「中古和文 UniDic」で1短単位(1語の複合形容詞)とされている折好い・心地良い・快い・言好い・様良い・根良い・折悪い・口悪い・心悪い・様悪い・物悪い・心悪(わろ)い・人悪(わろ)い・人悪(わる)いは、名詞・形容詞の2短単位に分割した上で、A/A+に分類した。

2. 3 「一語性」をどのように考えるか

図1に示したように、名詞・形容詞が直接結びつくA・A+の場合、複合形容詞候補として十分な条件を備えていると見なせる(I類)。しかし、名詞・形容詞が助詞を介して結びつくB・B+・C・C+の場合、1語とは見なせない(II類)。そして、D・d・E・e・F・fのように名詞・形容詞の間に形容詞を修飾する副詞が挟まる場合や、a・b・c・d・e・fのように名詞にかかる接頭辞や連体句が存在する場合は、2語の隔たりは一層強く感じられる(III類)。I類はダイス係数の大小、II・III類は助詞の数の多少などを基準に、より複雑な段階を設定することもできようが、ここではひとまず図1のように把握する。なお、図1中、薄い網掛けで表したように、それぞれの構文が一語化の途中である可能性ももちろんある。

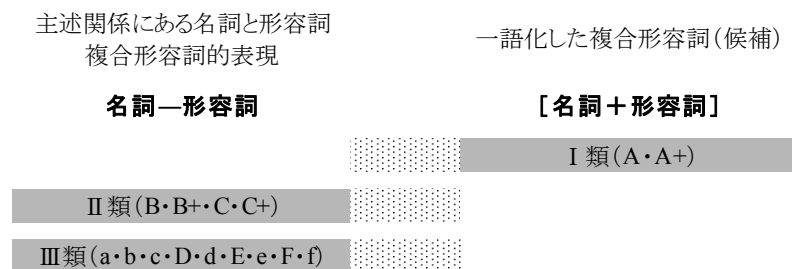


図1 一語性

実際には、ある名詞・形容詞の組み合わせがI・II・III類のいずれかひとつに分類されることは少なく、複数の類にまたがり複雑な様相を呈する場合が多い。そうした分布状況を踏まえた上で、名詞一形容詞の一語性を検討する必要がある。

3. 考察

考察対象の名詞一評価形容詞の一覧を表2~5としてまとめた。各構文の延べ語数と類、類それぞれの占める割合を示した。また、I類(A・A+)についてはダイス係数(その算出に必要な名詞X・形容詞Yの語数)を掲げ、『日本国語大辞典(第二版)』(以下、『日国』)における立項状況についても記載した。なお、以下でコロケーション強度の強弱について触れる場合、須永(2011)の明らかにしたダイス係数0.004を基準としている。

3. 1 名詞一ヨシ

3. 1. 1 複合形容詞候補

名詞一ヨシのうち、I類としてのみ現れ、かつ、コロケーション強度の強いものに声/折一ヨシがある。これらは複合形容詞としての条件を備えていると考えられる。

- (1)伊勢の海ならねど、清き渚に貝や拾はむなど、声よき人にうたはせて、我も時々拍子とりて、声うち添へたまふを、(源氏物語・明石)【I類(A)】
- (2)「さうざうしくねぶたかりつる。をりよくものしたまへるかな」(源氏物語・常夏)【I類(A)】

名詞一ヨシの中で注目されるのは、コロケーション強度が強いI類として現れながらII・III類にわたるものが多いことである。(i)人間の姿や形といった見た目の描写に(も)用

表2 名詞—ヨシ

連体句	程度副詞	複頭(修飾)	名詞	助詞	助詞	副詞	形容詞	計	類	%	D係数	X+Y	X:名詞	Y:形容詞	日国
様—ヨシ								26							立項
	イト		様				ヨシ	5	A+	I	92.3%	0.0170	2827	2191	636
	フサフサ		様				ヨシ	1	A						
			様				ヨシ	18	A						
		有	様				ヨシ	2	a	III	7.7%				
心—ヨシ								25							立項
	イト		心				ヨシ	5	A+	I	76.0%	0.0123	4069	3433	636
	アマリ		心				ヨシ	1	A						
			心				ヨシ	13	A						
			心	ノ			ヨシ	1	B	II	4.0%				
			心			イト	ヨシ	1	D						
			心	ナド	ハ	イト	ヨシ	1	F	III	20.0%				
		有	心				ヨシ	2	a						
		有	心	ナム		イト	ヨシ	1	e						
形(カタチ)—ヨシ								22							立項
			形[カタチ]				ヨシ	14	A	I	63.6%	0.0301	930	294	636
			形[カタチ]	ナド			ヨシ	2	B	II	13.6%				
			形[カタチ]	ハ			ヨシ	1	D						
			形[カタチ]			イト	ヨシ	3	D						
		有	形[カタチ]	ノ			ヨシ	1	a	III	22.7%				
		有	形[カタチ]	ナド	モ	イト	ヨシ	1	f						
仲—ヨシ								8							立項
			仲				ヨシ	3	A	I	37.5%	0.0082	734	98	636
		有	仲				ヨシ	3	a						
		有	仲			イト	ヨシ	1	d	III	62.5%				
		有	仲	ハ		イト	ヨシ	1	e						
顔—ヨシ								5							立項
			顔				ヨシ	2	A	I	40.0%	0.0042	954	318	636
			顔	ノ		イト	ヨシ	1	D						
			顔	モ		イト	ヨシ	1	D	III	60.0%				
			顔	コソ		イト	ヨシ	1							
気色(ケシキ)—ヨシ								4							
			気色[ケシキ]			イト	ヨシ	2	D						
		有	気色[ケシキ]				ヨシ	2	a	III	100.0%				
声—ヨシ								4							
			声				ヨシ	4	A	I	100.0%	0.0072	1116	480	636
丈立チ—ヨシ								4							
			丈立チ				ヨシ	2	A	I	50.0%	0.0062	645	9	636
			丈立チ			イト	ヨシ	2	D	III	50.0%				
人柄—ヨシ								4							
			人柄	モ		イト	ヨシ	3	D	III	100.0%				
			人柄	ノ		イト	ヨシ	1							
事—ヨシ								3							立項
			事				ヨシ	2	A	I	66.7%	0.0005	7556	6920	636
	有		事	ヲ	ゾ		ヨシ	1	c	III	33.3%				
人—ヨシ								3							
			人	ノ			ヨシ	1	B	II	33.3%				
	有		人				ヨシ	1	a	III	66.7%				
	有		人	ゾ			ヨシ	1	b						
折—ヨシ								3							立項
			折				ヨシ	3	A	I	100.0%	0.0050	1204	568	636

いられる様／形(カタチ)／顔／丈立チ—ヨシ、(ii)人間の気質・心身の状態を表す心—ヨシ、(iii)人間関係を表現する仲—ヨシがこれにあたる。これらは、一語化した複合形容詞として振る舞いながらも、多様な構文を展開する複合形容詞的表現としても用いられている。

- (3)涙のこぼるるさまぞ、さまよき人もなかりける。(堤中納言物語)【I類(A)】
- (4)かたちいとよく、心もをかしき人の、(枕草子・250)【III類(D)】
- (5)この君たち、御仲いとよし。(源氏物語・若菜下)【III類(d)】

なお、(ii)心—ヨシは叙述対象により表す意味が異なる。すなわち、他者の〈心が良い〉であれば評価の意味〈気立てが良い〉を表し (I・II・III類:16例)、自己の〈心が良い〉であれば感覚の意味〈気持ちが良い・快い〉を表す (I類:9例)⁶。興味深いのは、心—ヨシの対義表現が、評価の意味〈気立てが悪い〉では心—アシ、感覚の意味〈気持ちが悪い・不快だ〉では心—ヨシの否定表現/心地—アシである点である (後述)。

- (6)もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心なく、いとよく語らひてあたりけり。…
 …もとの妻、いと心よき人なれば、男にもいはでのみありわたりけれども、
 (大和物語)【III類(D)]・【I類(A+)]
- (7) [車を] いと心よう言ひて貸したるに、
 (枕草子・326)【I類(A+)]

3. 1. 2 複合形容詞的表現

I類として現れ得てコロケーション強度の強い3.1.1とは反対に、I類として現れ得るがコロケーション強度の弱いものに事—ヨシがある。この他、II・III類としてのみ現れる気色(ケシキ) / 人柄 / 人—ヨシがある。

- (8)「よき御男ぞいで来む」とあはする [=夢解きをする] に、この女、けしきいとよし。
 (伊勢物語)【III類(D)]
- (9)人柄もいとよくおはすれば、あまた参り集まりたまふ中にもすぐれて時めきたまふ。
 (源氏物語・賢木)【III類(D)]

3. 2 名詞—ヨロシ

表3 名詞—ヨロシ

連体句	程度副詞	接頭辞	名詞	助詞	助詞	副詞	形容詞	計	類	%	D係数	X+Y	X(名詞)	Y(形容詞)	日国
心地—ヨロシ								5							
			心地	ハ			ヨロシ	1	B	II	20.0%				
	有		心地				ヨロシ	2	a						
		有	心地	モ			ヨロシ	1	b	III	80.0%				
		有	心地	ノ			ヨロシ	1							
気色(ケシキ)—ヨロシ								3							
			気色[ケシキ]				ヨロシ	1	A	I	33.3%	0.0017	1199	1041	158
	有		気色[ケシキ]				ヨロシ	2	a	III	66.7%				

名詞—ヨロシには、I類として現れ得るがコロケーション強度の弱い気色(ケシキ)—ヨロシ、II・III類としてのみ現れる心地—ヨロシがある。いずれも複合形容詞的表現である。また、心地—ヨロシ 5例は全て『源氏物語』の用例であり、一般的な表現であったかは不明である。名詞—ヨロシに複合形容詞と認めるべきものはないようである⁷。

- (10)「心地はよろしくなりにてはべるを、かの宮のなやましげにおはすらむに、……」
 (源氏物語・若菜下)【II類(B)]
- (11)〈帰りたまはむには、御としみをぞしたまはむ。北の方けしきよろし〉と見て、
 (落窪物語・1)【I類(A)]

3. 3 名詞—アシ

⁶ 中古の「心」は、人間が基本的に抱き続けている思い・気持ちと人間の性質・心持ちとを表す(中尾 1999)。
⁷ 『日国』においてもヨロシを後項に持つ複合形容詞は立項されておらず、小見出しとして事—ヨロシが挙げられるのみである(事—ヨロシはI類(A)1例、III類(a)1例の計2例のため表未掲載)。

表4 名詞—アシ

連体句	程度副詞	接頭辞「御」	名詞	助詞	助詞	副詞	形容詞	計	類	%	D係数	X+Y	X(名詞)	Y(形容詞)	日国
心地—アシ								35							小見出し
	イ		心地				アシ	1	A+	I	45.7%	0.0243	1317	1090	227
			心地				アシ	15	A						
			心地	ノ			アシ	3							
			心地	ハ			アシ	1	B	II	17.1%				
			心地	モ			アシ	2							
			心地	ナド	ヤ		アシ	1	C		2.9%				
	有		心地				アシ	2	a		5.7%				
			心地	ナム		イ	アシ	1							
			心地	ハ		イ	アシ	1							
			心地	コソ		イ	アシ	1							
			心地	ノ		イ	アシ	1							
			心地	ノ		イ	アシ	3	E	III	28.6%				
			心地	モ		イ	アシ	1							
	有		心地	モ		イ	アシ	2							
			心地	モ		些カ	アシ	1							
様—アシ								24							立項
	イ		様				アシ	1	A+	I	95.8%	0.0190	2418	2191	227
			様				アシ	22	A						
	有		様				アシ	1	a	III	4.2%				
気色(ケシキ)—アシ								17							小見出し
	イ		気色[ケシキ]				アシ	1	A+	I	35.3%	0.0095	1268	1041	227
			気色[ケシキ]				アシ	5	A						
	イ		気色[ケシキ]	モ			アシ	1	B+	II	5.9%				
	有		気色[ケシキ]				アシ	7	a						
	有		気色[ケシキ]	ノ			アシ	1	b	III	58.8%				
	有		気色[ケシキ]			イ	アシ	1							
	有		気色[ケシキ]			甚ダ	アシ	1	d						
折—アシ								11							立項
			折				アシ	11	A	I	100.0%	0.0277	795	568	227
乱り心地—アシ								5							
			乱り心地				アシ	2	A	I	40.0%	0.0160	250	23	227
			乱り心地	ノ			アシ	3	B	II	60.0%				
為—アシ								4							
			為				アシ	1	A	I	25.0%	0.0045	446	219	227
	有		為				アシ	3	a	III	75.0%				
心—アシ								3							立項
	イ	ミジク	心				アシ	1	A+	I	66.7%	0.0011	3660	3433	227
			心				アシ	1	A						
			心	ナド			アシ	1	B	II	33.3%				
手—アシ								3							
	有		手	ナド			アシ	1	b						
			手	モ		イ	アシ	1		E	100.0%				
			手	ハ		イ	アシ	1							
仲—アシ								3							小見出し
	少シ		仲				アシ	1	A+	I	100.0%	0.0185	325	98	227
			仲				アシ	2	A						
形(ナリ)—アシ								3							
			形[ナリ]				アシ	2	A	I	66.7%	0.0167	239	12	227
			形[ナリ]	ノ		イ	アシ	1	E	III	33.3%				
物—アシ								3							立項
			物				アシ	2	A	I	66.7%	0.0011	3709	3482	227
			物	ノ			アシ	1	B	II	33.3%				

3. 3. 1 複合形容詞候補

名詞—アシのうち、I類としてのみ現れ、かつ、コロケーション強度の強いものに折／仲—アシがある。対義関係にある折／仲—ヨシ（前述）とともに、複合形容詞と言える。

(12) いつぞやも参り来てはべりしかど、折あしうてのみ帰れば、

(和泉式部日記)【I類(A)】

(13) すこし仲あしうなりたるころ、文おこせたり。

(枕草子・80)【I類(A+)】

名詞一アシの中で目立つのは、名詞一ヨシと同様に、コロケーション強度が強いI類として現れながらII・III類にわたるものの多さである。(i)人間の姿や形といった見た目について(も)描写する様／形(ナリ)一アシの他、(ii-ii)人間の心身の状態の表現に用いられる心地／気色(ケシキ)／乱リ心地一アシ⁸がこれにあたる。これらは、複合形容詞としての条件を十分に満たすものであるが、複合形容詞的表現としても様々な構文を展開している。

(i)人間の姿や形といった見た目の描写において、プラス評価の表現には様／形(カタチ)／顔／丈立チ一ヨシなど安定して用いられるバリエーションがある(前述)が、マイナス評価の表現において定着しているのは様／形(ナリ)一アシのみである。もちろん前項名詞の指す意味領域の相違も考慮しなければならない⁹が、人間の見た目の描写として広く捉えた場合に、評価性によって表現形式のバリエーションが異なるのは興味深い。

- (14)この、いとよふかひなく、情なく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをも過ぐしつるなり。(源氏物語・東屋)【I類(A)】
 (15)落窪をさしのぞいて見たまへば、なりのいとあしくて、(落窪物語・1)【III類(E)】

(ii-ii)人間の心身の状態の表現においては、その評価性によって一語性に差異が見られる。すなわち、マイナス評価を表す心地／気色(ケシキ)／乱リ心地一アシは複合形容詞としての性格をも有するのに対し、プラス評価を表す心地一ヨシ(II類(B)1例のため表未掲載)／ヨロシ、気色(ケシキ)一ヨシ／ヨロシは複合形容詞的表現である(前述)。

- (16)「心地なむいとあしき」とて臥したれば、(落窪物語・2)【III類(E)】
 (17)楫取、また鯛持て来たり。米、酒、しばしばくる。楫取、気色悪しからず。(土佐日記)【I類(A)】

3. 3. 2 複合形容詞的表現

I類として現れ得るがコロケーション強度の弱いものに為／心／物一アシ¹⁰がある。また、II・III類としてのみ現れるものには手一アシがある。

心一アシは(ii-i)人間の気質の描写に用いられ、他者の〈心が悪い〉つまり〈気立てが悪い〉という評価の意味を表す。前述したように、対義関係にある心一ヨシは、(ii-i)人間の気質だけでなく、心一アシには見られない(ii-ii)人間の心身の状態の描写にも用いられる¹¹。

- (18)かたちにくさげに心あしき人。(枕草子・135)【I類(A)】
 (再掲) [車を] いと心よう言ひて貸したるに、(枕草子・326)【I類(A+)】

物一アシは『日国』に立項され、初出例として『落窪物語』が挙げられている。ただし、今回の調査によると、物一アシはコロケーション強度の弱い複合形容詞的表現と考えられ、またすべて『落窪物語』の用例であることから、広く用いられた表現とは考えにくい。

⁸ 「心地」は場所や環境などにより変化する心情・気分を指す(中尾1999)のに対し、「気色(ケシキ)」は感受者が感受して初めて存在する、眼前にない個別的な人・事物の状態・動作等の現れを指す(辛島2010)という相違がある(気色(ケシキ)一アシとしては専ら人間の心理状態・機嫌を描写するようである)。

⁹ 中世後期末～近世初期における様態を表す語彙の意味記述は、小野(1991)に詳しい。

¹⁰ 物一アシのような物一形容語の「物」が接頭辞であるか名詞であるかについては諸説あるところ(東辻1997・池上印刷中など参照)だが、ここではひとまず名詞と考えておく。

¹¹ 『日国』「こころあし」には、心身の状態を言う「(2)気分が悪い。病気である。」があり、春曙抄本『枕草子』「いささか心あしなどいへば、常よりも近く臥して、物くはせいとほしがり」を初出例として挙げる。

(19)げに今宵は三日の夜なりけるを。物のはじめに、ものあしう思ふらむ。

(落窪物語・1)【I類(A)】

3. 4 名詞—ワロシ／ワルシ

表5 名詞—ワロシ／ワルシ

連体句	程度副詞	接頭修飾	名詞	助詞	助詞	副詞	形容詞	計	類	%	D係数	X+Y	X(名詞)	Y(形容詞)	日国
人—ワロシ								50							立項
	ト		人				ワロシ	5	A+	I	100.0%	0.0146	6839	6764	75
	トド		人			ワロシ	2								
	少シ		人			ワロシ	2								
	一際		人			ワロシ	1								
	又無ク		人			ワロシ	1								
			人			ワロシ	39	A							
人—ワルシ								7							立項
			人				ワルシ	7	A	I	100.0%	0.0021	6783	6764	19

延べ語数 3 以上の名詞—ワロシ／ワルシに「人」を前項とするものがある。人—ワロシはI類としてのみ現れ、かつ、コロケーション強度の強い複合形容詞と呼べるが、人—ワルシはI類として現れ得るがコロケーション強度が弱いため 1 語と認めがたい。しかし、名詞・評価形容詞を単純に足した意味でなく、〈他人に対して体裁が悪い・みっともない〉さまを表している¹²ことから、人—ワロシ／ワルシはともに 1 語として認めてよいだろう¹³。なお、こうした意味は人—アシにはない (II類(B) 1 例のため表未掲載)。

(20)猿楽がましくわびしげに人わろげなるなど、さまざまに、げにいとなべてならず、さま異なるわざなりけり。
(源氏物語・少女)【I類(A)】

(21)都を遠ざからんも、古里おぼつかかなかるべきを、人わるくぞ思し乱るる。
(源氏物語・須磨)【I類(A)】

3. 5 名詞—評価形容詞

3.1 から 3.4 までの考察を踏まえた上での全体の傾向や、補足すべき点について述べる。

3. 5. 1 複合形容詞候補の一語性

中古和文における複合形容詞候補の一語性の特徴として、コロケーション強度の強い I 類としてのみ現れる名詞—形容詞よりも、コロケーション強度の強い I 類として現れながら II・III類にわたる名詞—形容詞の多いことが挙げられる。このことから、中古和文における [名詞+評価形容詞] 候補の多くが、「語としてのまとまりを維持しつつも、様々な構文バリエーションを展開し得る一語性」を有していると考えられる。単に複合形容詞であると認定するだけでなく、こうした一語性についてあえて指摘するのは、複合形容詞と文との関係を考える場合に重要な観点となるためである。

言うまでもないが、複合形容詞 [名詞+形容詞] には、㊦意味変化の生じるものと㊧意味変化の生じないものがある。㊦の方が㊧よりも語としてのまとまりが強く感じられ、一語性に相違が見られる。一方で、名詞—助詞—形容詞のような文にも、㊦意味変化の生じるものと㊧意味変化の生じないものがある。㊦は一般に慣用句と呼ばれる。

前項・後項のコロケーション強度によって 1 語と認められる複合形容詞 [名詞+形容詞] の㊦が、共時的に名詞—助詞—形容詞のような文の㊦にパラフレーズ可能である場合、「複

¹² 人・ワロイ／ワルイを単純に足した〈人となりが悪い〉が専ら自己に対して用いられることで、語用論的意味である〈自分が〈人となりが悪い〉〉＝〈他人に対して体裁が悪い〉を表すようになった、という意味変化が考えられよう。なお、異なる立場に、「複合形容詞化することにより「人から〜れる」というヴォイス性を持った表現になっている」(p.8) とする漆谷(2012)がある。

¹³ 〈短気である〉さまを表す腹—アシ (I類(A) 2 例のため表未掲載) も同じ条件で 1 語と認められよう。

合形容詞と文との近接現象」(山本 1996:47)が問題になる。これは、中古和文に散見される、コロケーション強度の強い I 類として現れながら II・III 類にわたる名詞—形容詞が多いという現象を考える際の問題そのものである。“語としてのまとまりを維持しつつも、様々な構文バリエーションを展開し得る一語性”を有するものは、複合形容詞である一方で、語と文との境界に位置する言語表現と考えられるのではなかろうか。

3. 5. 2 複合形容詞候補の表す意味領域

中古和文における複合形容詞候補のうち、両極の評価性が描写され得る意味領域を挙げれば、(i)人間の姿や形といった見た目(様—ヨシ/アシ)、(ii-i)人間の気質(心—ヨシ/アシ)、(ii-ii)人間の心身の状態(心—ヨシ・心地—アシ)、(iii)人間関係(仲—ヨシ/アシ)、(iv)時期・機会(折—ヨシ/アシ)がある。(i)~(iii)から明らかなように、特に“人間”の描写に関わる意味領域の名詞—評価形容詞が多い。

そもそも、日本語の中で生産性のある複合形容(動)詞は、「叙述対象が、語内の名詞と部分—全体の関係にあるものに限定されている」(由本 2009:219)。このことを踏まえれば、中古和文の複合形容詞候補の多くは、人間(=全体)を描写するために、“人間の外形/内部的状態(気質・心身の状態)/他者と築く関係性”を表す名詞(=部分)と評価形容詞とが結びつき産出された表現である言えるのではなかろうか。

3. 5. 3 韻文/散文の別

和歌の用例は次に挙げる延べ語数 1 のもののみであった。

(22)いで人は言(こと)のみぞよき月草のうつし心は色ことにして

(古今和歌集・14)【II類(C)】

(23)月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず

(古今和歌集・14)【I類(A)】・【I類(A)】

和歌中に複合形容詞(的表現)がないわけではなく、例えば、『日国』や「中古和文 UniDic」で複合形容詞として認められている[甲斐+ナシ]は 11 例、複合形容詞的表現である III 類(a)・(b)は 18 例ある¹⁴。名詞率が高く MVR(100×相の類の比率/用の類の比率)が低い「要約的な文章」と考えられる中古和歌(富士池 2014)ゆえに、複合形容詞に限らず形容詞それ自体が地の文・会話文に比べて出現しにくいのかかもしれない。

4. おわりに

本発表では、中古和文における複合形容詞[名詞+形容詞]の一語性を探るために、名詞と評価形容詞との間に助詞や副詞を介するような複合形容詞的表現を含めた名詞—評価形容詞の調査・考察を行った。その結果、中古和文における名詞—評価形容詞それぞれの構文バリエーションの全体像を明らかにしただけでなく、この頃の複合形容詞[名詞+評価形容詞]の候補に 2 つの特徴があることを指摘した。第一に、前項と後項とのコロケーション強度が高く複合形容詞として認められそうな名詞—評価形容詞であっても、それらの多くは共時的に複合形容詞的表現にパラフレーズ可能であり、語と文とを行き来する一語性を有していたという点である。第二に、一語化していると考えられる名詞—評価形容詞には、人間を叙述対象として、その部分・属性の善し悪しを表現するために産出されたと思われるものが目立つという点である。

今回は評価形容詞に限定したが、如上の傾向が名詞—形容詞全般に指摘し得るのかどうか確認する必要がある。調査対象を広げ考察を発展させていく中で、中古和文における複合形容詞[名詞+形容詞]と文との関係についても検討していきたい。

¹⁴ 「甲斐」が掛詞になり得ることも関係しているか。

付記

本発表は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」(プロジェクトリーダー: 田中牧郎) による成果の一部である。

文献

- 池上 尚(印刷中)「モノクサシの語史—嗅覚表現〈くさい〉から性向表現〈ものぐさ〉へ—」
石川慎一郎(2008)「コロケーションの強度をどう測るか—ダイス係数, tスコア, 相互情報量を中心として—」『言語処理学会第14回大会チュートリアル資料』40:50
漆谷広樹(2012)「古代語・現代語の複合形容詞の比較—名詞+形容詞の複合形容詞の場合—」『愛知大学文学論叢』146 pp.236-211
小野正弘(1991)「室町末期から江戸初期における《様態・形態》を表す語彙—「恰好」の中立的意味の成立を考えるために—」『日本近代語研究』1 pp.519-541
辛島美絵(2010)『古代の〈けしき〉の研究—古文書の資料性と語の用法—』清文堂出版
須永哲矢(2011)「コロケーション強度を用いた中古語の語認定」『国立国語研究所論集』2 pp.91-106
西尾寅弥(1972)『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
中尾比早子(1999)「「心」と「心地」」『実践国文学』53 pp.237-254
東辻保和(1997)『もの語彙こと語彙の国語史的研究』汲古書院
飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
富士池優美(2014)「品詞比率からみる中古和文テキストの特徴」『日本語学会 2014 年度春季大会予稿集』pp.185-190
村田菜穂子(2005)『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院
山本清隆(1996)「複合語と文の境界」『日本語学』15:9 pp.41-49
由本陽子(2009)「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」『語彙の意味と文法』くろしお出版 pp.209-229

関連 URL

- 「日本語歴史コーパス 平安時代編」http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/
「中古和文 UniDic」<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic>